臨床能力重視型教育への模索　第一報

－客観的臨床能力評価を実施して－

2007.3.22

山口　信 1)　小堀晶弘 1)　柗本里佳 1)　松原慶吾 1)
1)メディカル・カレッジ青照館

[抄録]

学生の臨床での能力を高めるために行われる客観的臨床能力評価（以下 OSCE）は医師養成過程に始まり、徐々にコ・メディカルの養成過程にも広がりつつある。本校（高卒４年制養成校）では平成 18 年度３年次演習授業の評価として OSCE を実施した。実施項目は成人と小児のバランスに配慮し医療面接・標準失語症検査・標準ディサースリア検査・WISC-Ⅲ・純音聴力検査の５項目とした。医療面接は先行研究と同じ要領で行ったが、他の４つはマンパワーを考慮し本校独自の方法・評価で行った。実施後のアンケートは先行研究のものを参考にして作成し、臨床評価実習終了後に無記名・記名で実施した。

アンケートの結果、先行研究と同じく、試験終了後の学生は OSCE に対して概ね肯定的に捉えていた。また、実習が終了してからも、OSCE が実習に役立ったと捉えている学生が多かった。態度やコミュニケーションに関する教育のニーズも高いことが伺われた。

実施項目や方法、実施時期などについてはまだ検討の余地があると思われた。

[はじめに]

言語聴覚士養成校の学生（以下 STS）の臨床能力の低下が言われて久しい。その原因として考えられるのが、少子化やリハビリテーションの大衆化による養成校入学時点での学生の基礎学力の不足である。しかし、高卒４年制の養成校に勤務する筆者らは、校内における座学において十分な能力を示しながら、実習における課題遂行に多大な困難を示す学生をも多く経験する。

本校では３年前の平成 15 年入学生（本校第５期生）からカリキュラムを全面的に改変し、実技を中心とした演習授業を大幅に取り入れた。今回、この新カリキュラムで養成された第５期生の臨床評価実習実施前の評価として OSCE を実施した。以下はその報告である。

[OSCE を実施した科目]

第３学年の ST 診断学・神経心理学演習・言語発達障害演習・発声発語嚥下障害演習・聴覚障害演習

[評価の対象とした検査]

①ST 診断学：初回面接
②神経心理学演習：SLTA の単語呼称・文の復唱の施行、症状の分析とタイプ分類
③言語発達障害演習：WISC-Ⅲの施行、家族への説明
④発声発語嚥下障害演習：標準ディサースリア検査の施行、症状の分析とタイプ分類
⑤聴覚障害演習：純音聴力検査の施行

[検査の実施者]

本校言語聴覚療法学科第３学年 28 名

[模擬患者]

①は本校言語聴覚療法学科第２学年 27 名

②～⑤は本校言語聴覚療法学科教職員各１名

[評価者]

①②は本校言語聴覚療法学科教職員各２名および病院勤務の言語聴覚士各１名

③～⑤は本校言語聴覚療法学科教職員各１名

[実施までのタイムスケジュール]

月	日	曜	第２学年	第３学年
5	18	木		OSCE 概要原稿提出済
5	23	火		OSCE 概要原稿検討済
5	30	火		OSCE 概要完成済
8	6	月		OSCE 要領原稿提出
8	7	火		OSCE 要領原稿検討
8	15	火		OSCE 要領完成
8	16	水		学生に告示
9	4	月	養成概要原稿提出	測定用紙原稿提出
9	5	火	養成概要原稿検討	測定用紙原稿検討
9	8	金	学生に告示	
9	12	月		測定用紙原稿完成
10	2	月	養成要領原稿提出	マニュアル原稿用紙提出
10	3	火	養成要領原稿検討	マニュアル原稿検討
10	10	火	養成要領完成	マニュアル原稿完成
10	13	金		教材印刷・作成
10	16	月	第１回養成講座	
10	23	月	第１回試験	
10	28		第１回評価	
10	30	月	第２回養成講座	
11	6	月	第２回試験	
11	10	金	第２回評価	
11	13	月	第３回養成講座	
11	20	月	第３回試験	
11	24	金	第３回評価・最終判定	
11	27	月	結果発表	バイタル測定
11	28	火		トランスファー測定
12	4	月		第１回測定

[実施要領]

1. 平成 18 年 12 月 4 日（月）医療面接測定

①メンバー表ー略

②測定手順

1)測定者は測定室で待機。面接者は 10 番教室、模擬患者は 9 番教室で待機。9:30 と 10:00 から測定が始まる面接者 2 名と模擬患者 2 名はそれぞれ部屋 1 と部屋 2 で待機。

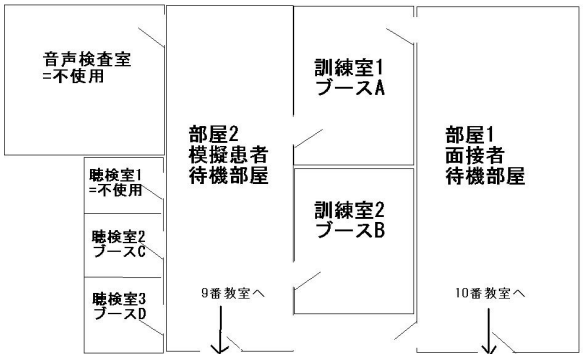
2)面接者は部屋 1 から測定室（ブース A～D）に入り、身だしなみのチェックを受けた後、部屋 2 から模擬患者を誘導。

3)面接者は面接を開始。測定者は測定を開始。

4)面接が終了したら面接者は 10 番教室に行き、次の面接者を部屋 1 に誘導。模擬患者は 9 番教室に行き、次の模擬患者を部屋 2 に誘導。

5)注意：面接者・模擬患者とも次の者の誘導が終了したら 9 番 10 番教室、教材作成室に留まらないこと。留まっている場合不正行為とみなす。

③測定場所



2. 平成 18 年 12 月 5 日（火）.7 日（木）SLTA.WISC 測定

①メンバー表ー略

②測定手順

1)測定者・模擬患者は測定室で待機。実施者は 10 番教室で待機。ただし、9:30 と 10:00 から測定が始まる SLTA 実施者 2 名と WISC 実施者 2 名は部屋 1 で待機。

2)SLTA 実施者は部屋 1 から測定室（ブース A）に入り、WISC 実施者は部屋 1 から測定室（ブース B）に入る。

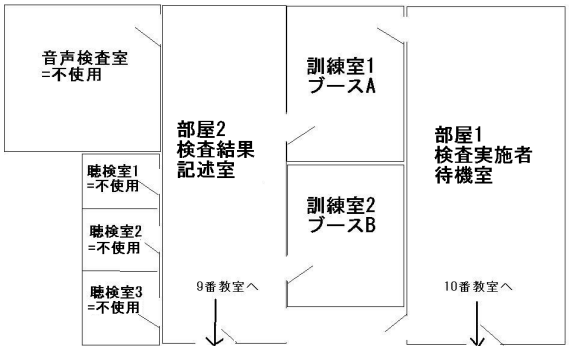
3)実施者は自分の手持ちのタイマー（50 分間にセット）を始動し、検査を開始。測定者は測定を開始。

4)検査が終了したら実施者は部屋 2 に行き、タイマー作動中に検査結果をまとめ、提出。

5)検査結果を提出した実施者は 10 番教室に行き、次の実施者を部屋 1 に誘導。

6)注意：面接者は次の者の誘導が終了したら 9 番 10 番教室、教材作成室に留まらないこと。留まっている場合不正行為とみなす。

③測定場所



3. 平成 18 年 12 月 11 日（月）医療面接再測定

①メンバー

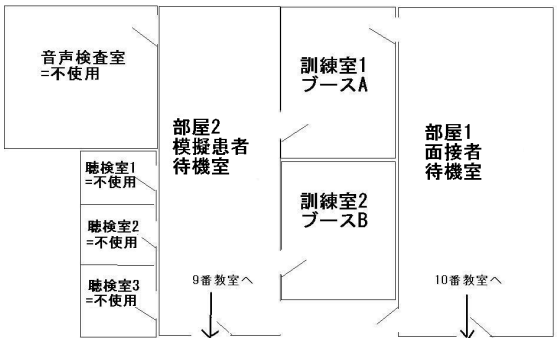
1)測定者：A３名　B２名

2)面接者：12/4 の測定で合格しなかった者。

3)模擬患者：再測定する 3 年生の人数に合わせて 2 年生から事前に指名。

②測定手順：12/4 の測定に準ずる。

③測定場所



4. 平成 18 年 12 月 12 日（火）.14 日（木）標準ディス・純音聴検測定

①メンバー表ー略

②測定手順：SLTA.WISC の測定に準ずる。

③測定場所：SLTA.WISC の測定に準ずる。

5. 平成 18 年 12 月 18 日（月）SLTA.WISC 再測定

①メンバー

1)測定者：SLTA２名　WISC１名

2)実施者：12/5.7 の測定で合格しなかった者。

3)模擬患者：SLTA 教員 A　WISC 教員 B

②測定手順：12/5.7 の測定に準ずる。

③測定場所：12/5.7 の測定に準ずる。

6. 平成 18 年 12 月 19 日（火）標準ディス、純音聴検再測定

①メンバー

1)測定者：標準ディス２名　純音聴検１名

2)実施者：12/12.14 の測定で合格しなかった者。

3)模擬患者：標準ディス教員 A　純音聴検教員 B

②測定手順：12/12.14 の測定に準ずる。

③測定場所：12/12.14 の測定に準ずる。

7. 平成 18 年 12 月 25 日（月）不合格者測定

①メンバー

1)測定者：教員 4 名で適宜交代。

2)実施者：各面接・検査の再測定で合格しなかった者。

3)模擬患者：教員４名で適宜交代。

②測定手順：各面接・検査の手順に準ずる。

③測定場所：各面接・検査の手順に準ずる。

[問題用紙・評価用紙・答案用紙]

①医療面接：評価用紙：別紙１

②標準失語症検査：評価用紙：別紙 2－１、答案用紙：別紙 2-2、問題用紙：別紙 2-3

③標準ディサースリア検査：略

④WISC-Ⅲ：略

⑤純音聴力検査：略

[測定結果]

①医療面接

28 名受験。平均 72.0 点、最高点 98 点、最低点 50 点。第１回目での合格者 21/28 名。

②標準失語症検査

28 名受験。平均 63.5 点、最高点 90 点、最低点 38 点。第１回目での合格者 17/28 名。

③標準ディサースリア検査

28 名受験。平均 68.9 点、最高点 93 点、最低点 42 点。第１回目での合格者 21/28 名。

④WISC-Ⅲ

28 名受験。平均 66.1 点、最高点 84 点、最低点 52 点。第１回目での合格者 18/28 名。

⑤純音聴力検査

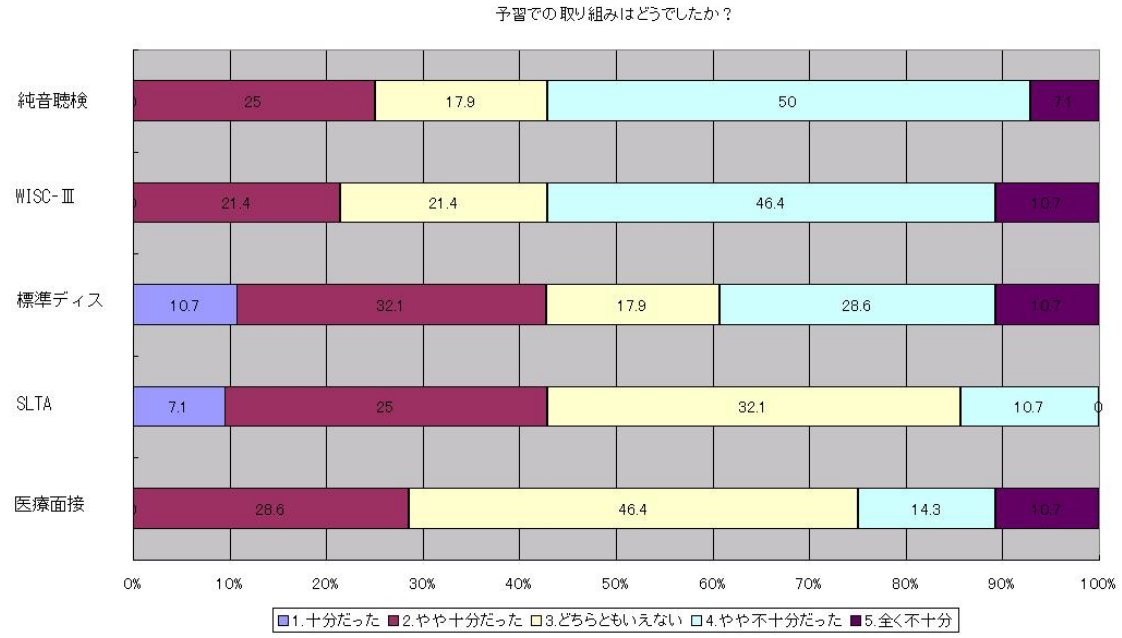
28 名受験。平均 59.4 点、最高点 76 点、最低点 52 点、第１回目での合格者 15/28 名。

[アンケート結果]

３年次臨床評価実習終了後の平成 19 年 3 月 16 日（金）に１．無記名・マークシート方式および２．記名・記述方式で実施した。アンケート１およびアンケート２は別紙 3. 4 の通り。

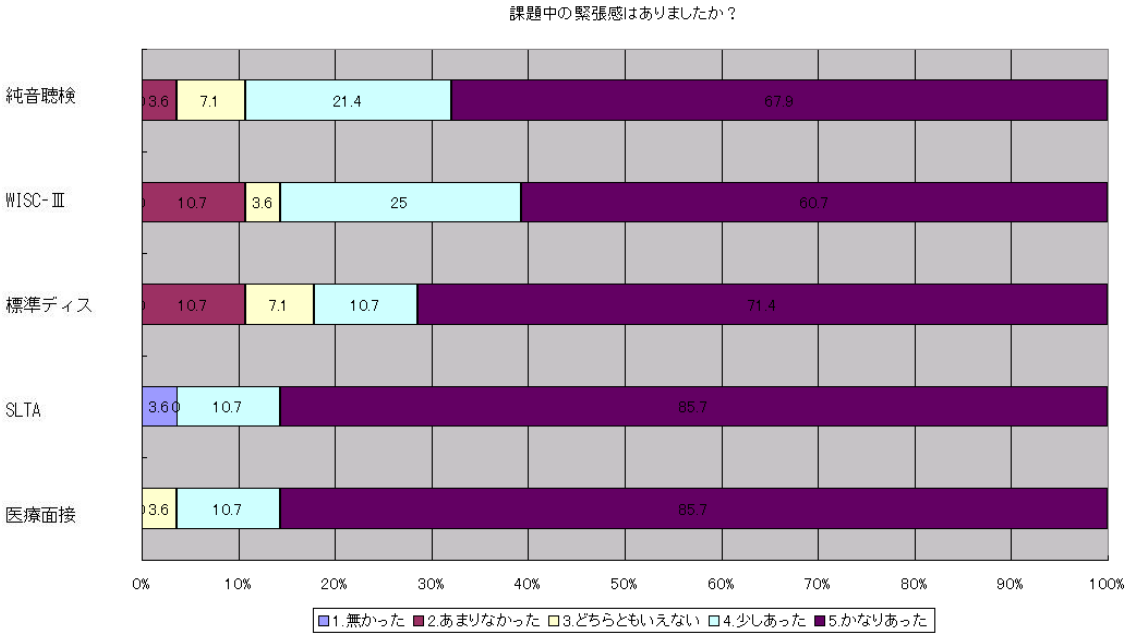
①試験終了後の感想

１．予習での取り組み



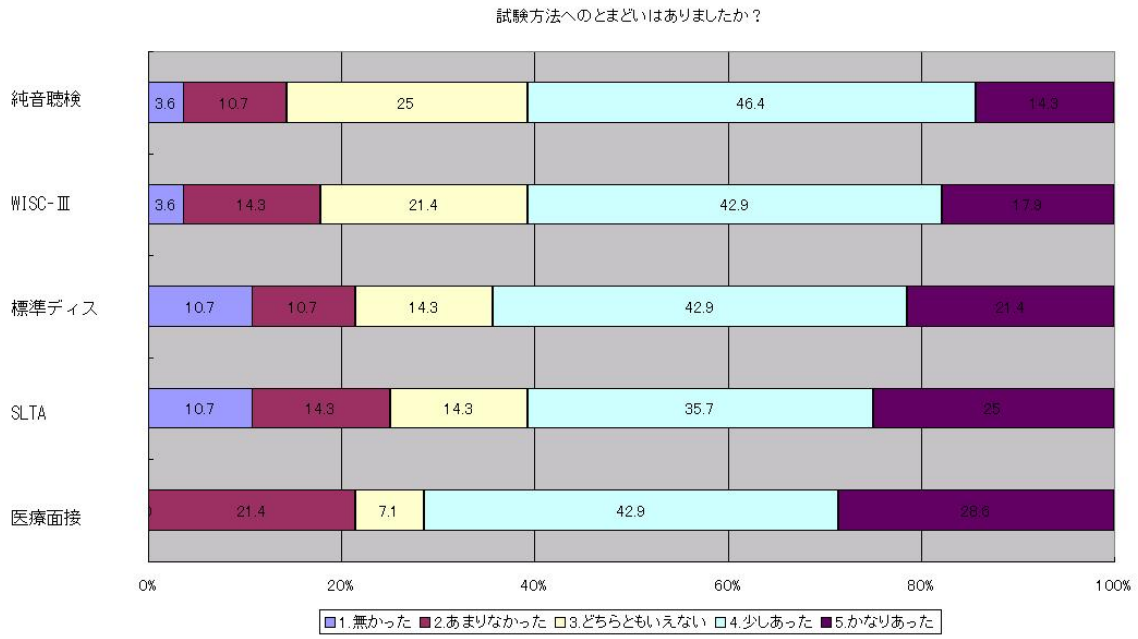
SLTA.標準ディサースリア検査では 40%以上の学生が「十分だった」「やや十分だった」と答え、比較的予習できたと感じていた。他の 3 つでは予習が十分でなかったと考える学生が 7 割以上いた。

２．課題中の緊張感



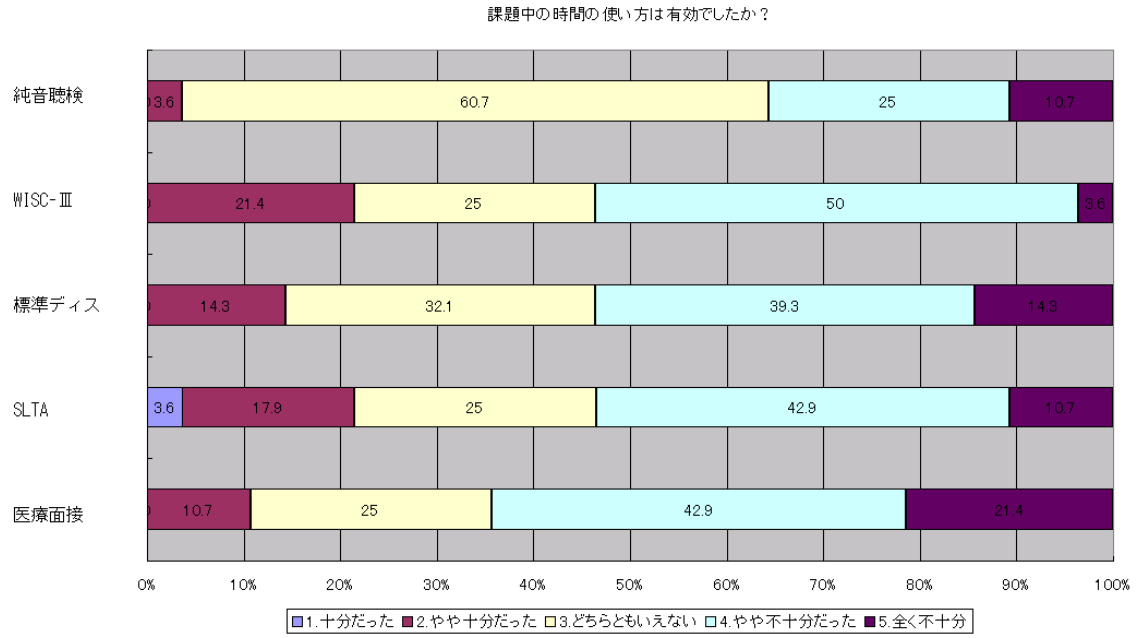
全ての課題で 80%以上の学生が、緊張が「かなりあった」「少しあった」と答え、全体的に緊張感を持って取り組んでいたことが伺えた。

３．試験方法へのとまどい



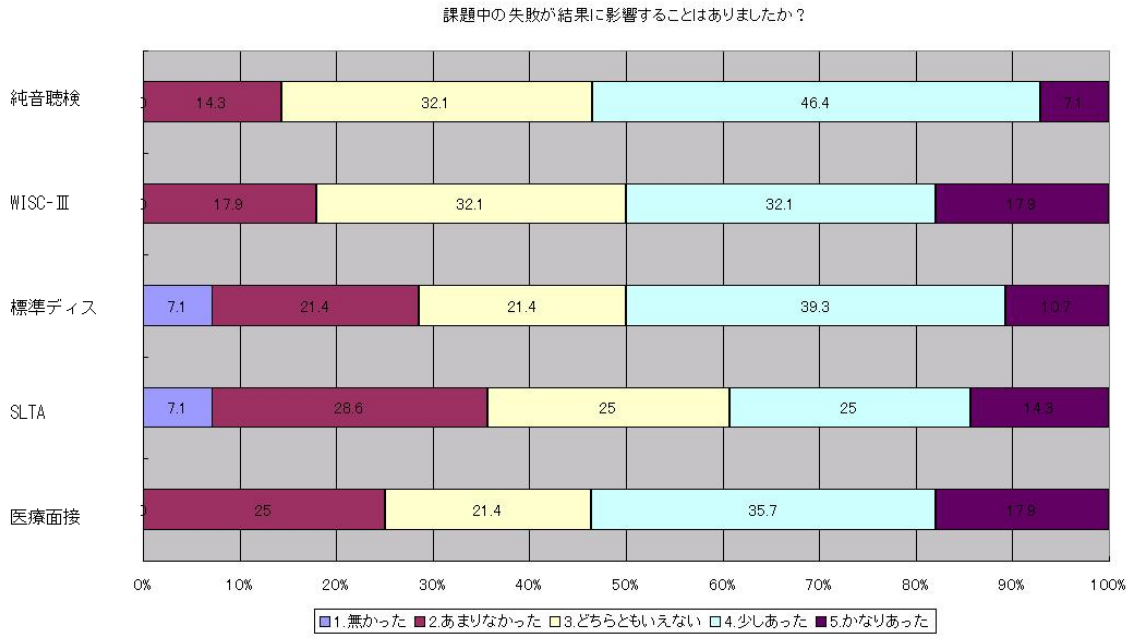
試験方法へのとまどいについては全ての課題で 60%以上の学生が「かなりあった」「少しあった」と答え、実技試験に対するとまどいを感じていることが伺えた。特に医療面接を評価されることに対して多くの学生がとまどっているようだった。

4. 課題中の時間の使い方



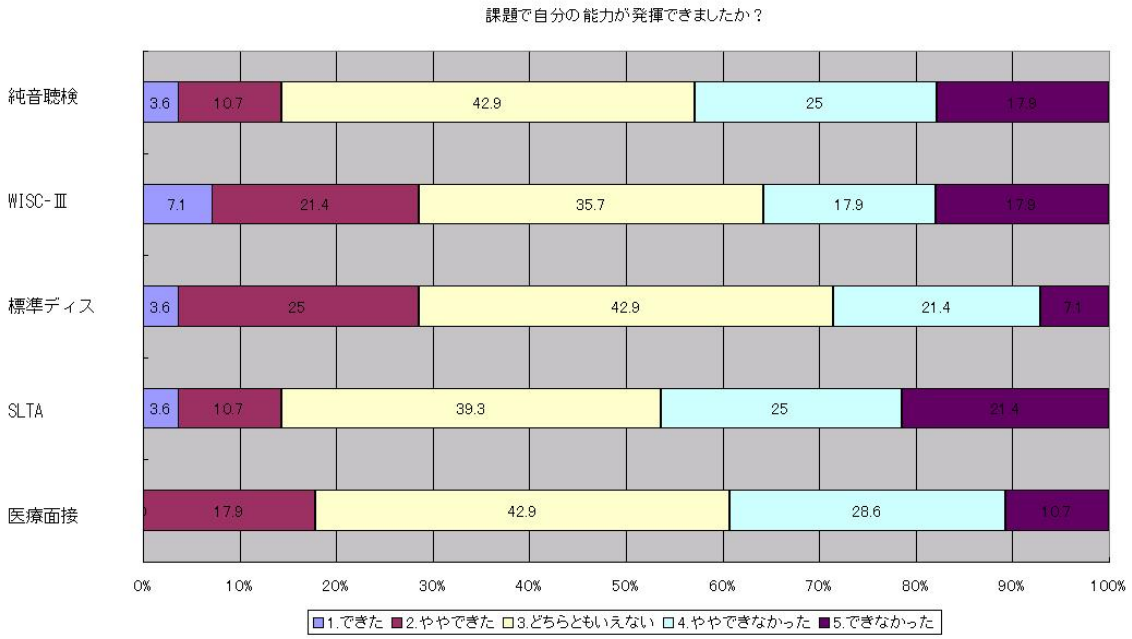
課題中の時間の遣い方については医療面接では 60%以上の学生が「全く不十分」「やや不十分だった」と答えているのに対して、純音聴検では 40%以下だった。

5. 課題中の失敗の影響



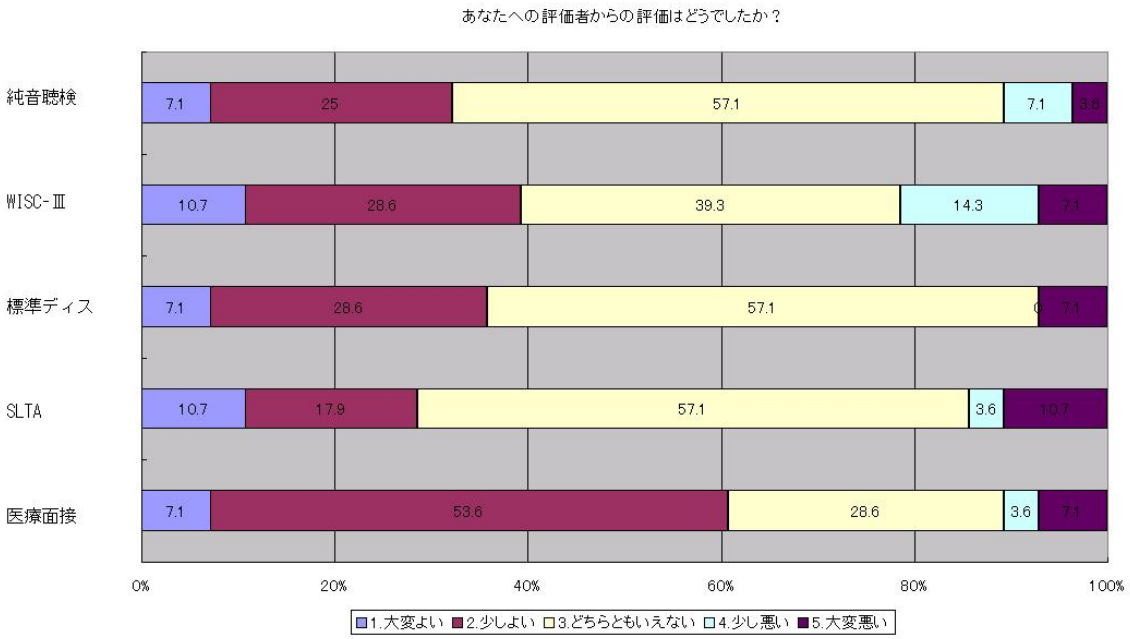
SLTA 以外の課題では５割以上の学生が、失敗が結果に影響することが「かなりあった」「少しあった」と答えた。SLTA では 40%近い学生が失敗の影響を全くまたはあまり感じていなかった。

6. 課題での能力の発揮



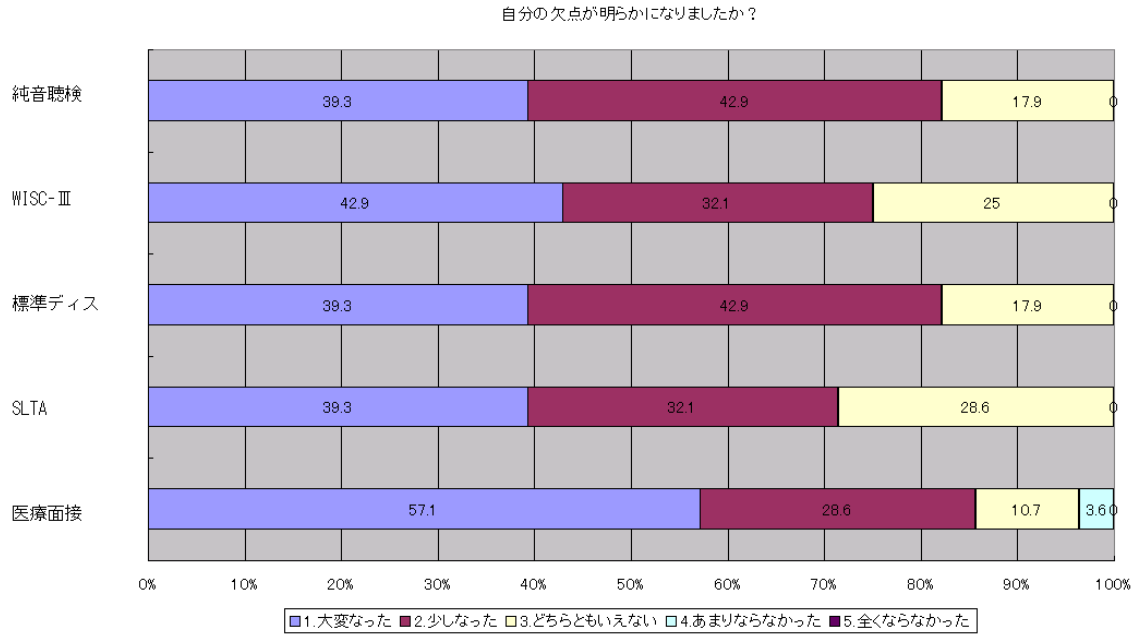
課題で自分の能力を発揮できたと感じている学生は最も多い WISC，標準ディサースリア検査でも 30%に満たず、多くの学生が本来の自分の能力を発揮できなかったと感じていることが伺えた。

7. 評価者からの学生への評価



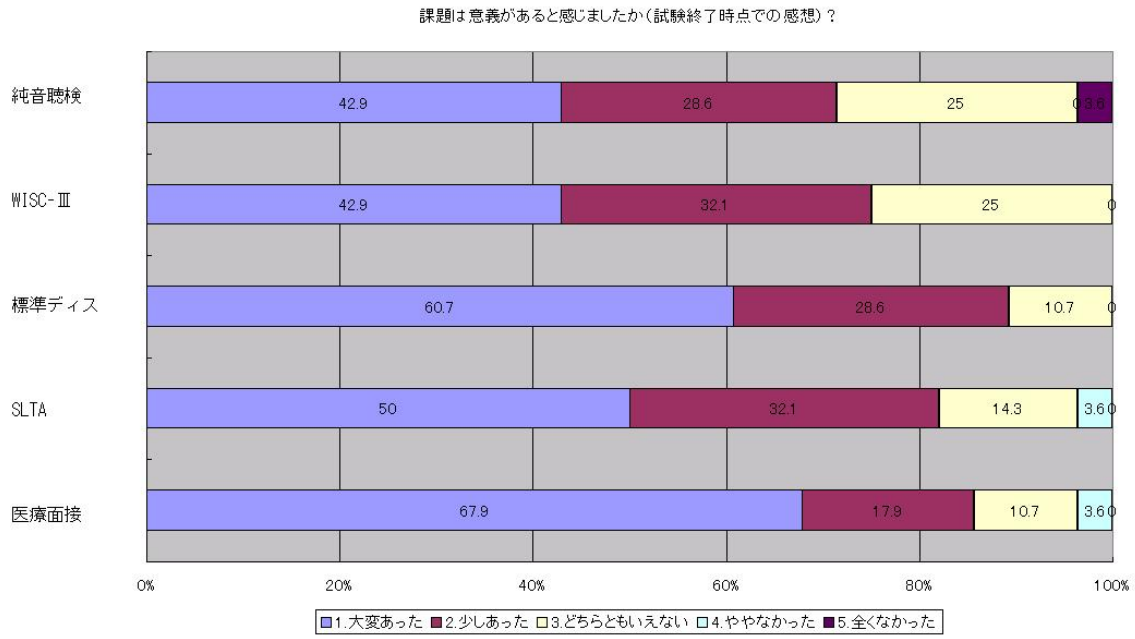
評価者からの学生への評価については医療面接でのみ 60%以上が「大変よい」「少しよい」と感じており、他の検査では「どちらともいえない」と感じていた。

8. 自分の欠点があきらかになったか？



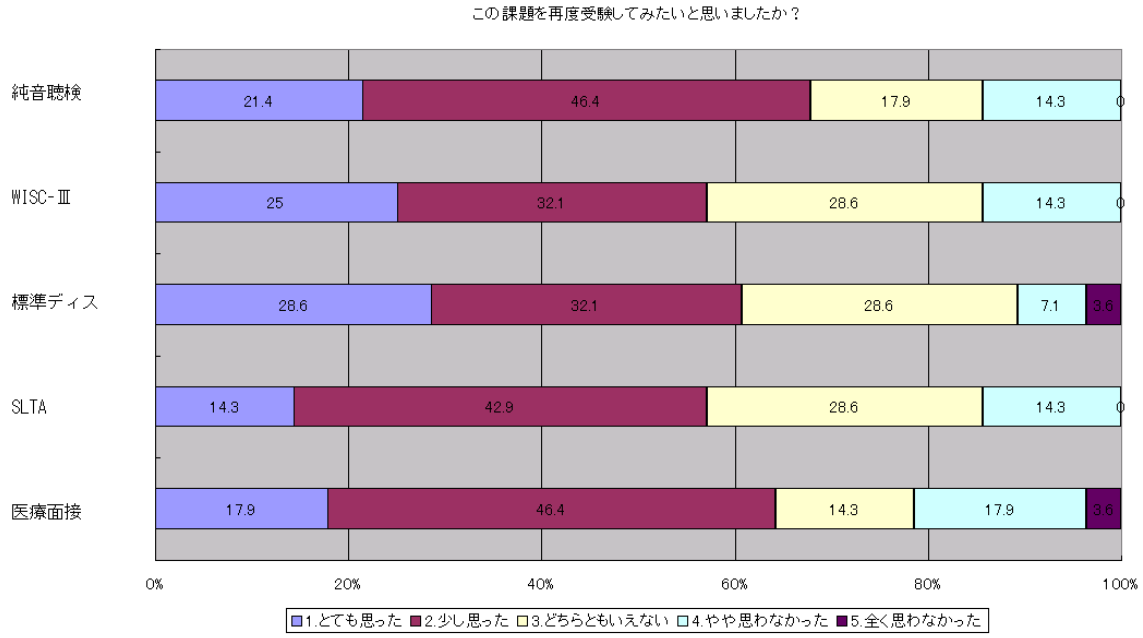
自分の欠点についてはほとんどの課題で８割近くが「大変明らかになった」「少し明らかになった」と答えており、課題により欠点が明らかになったと感じていることが伺えた。

９．課題の意義（試験終了時点）



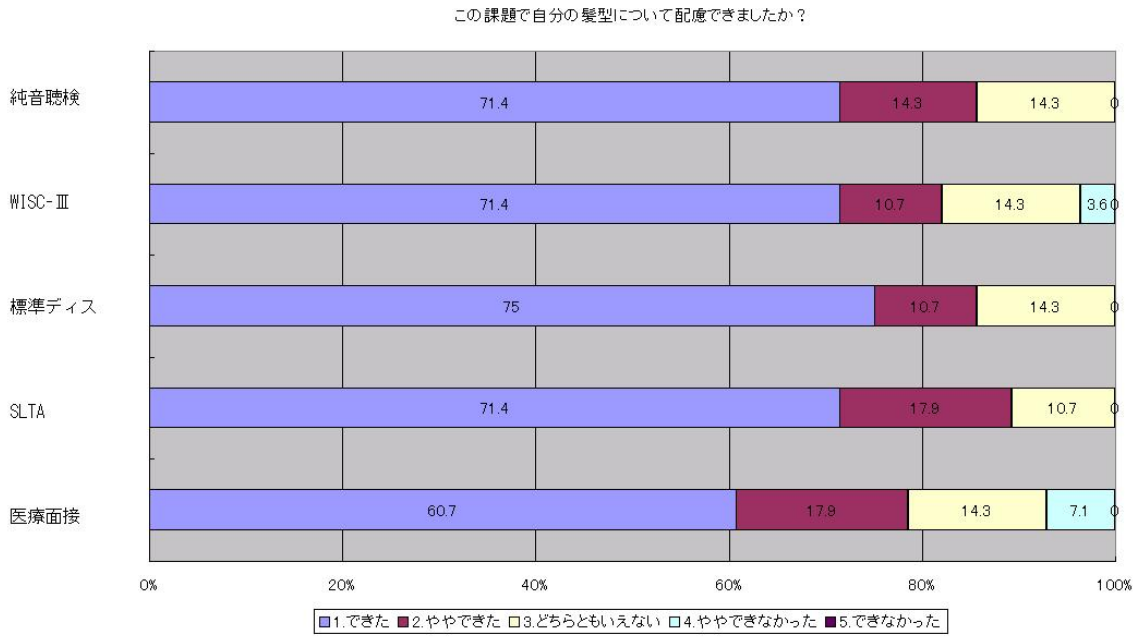
試験終了時点で最も低い課題でも７割以上の学生が課題に意義が「大変あった」「少しあった」と感じていた。特に医療面接に関しては７割近くの学生が「大変意義があった」と感じていた。

10．再受験の意志



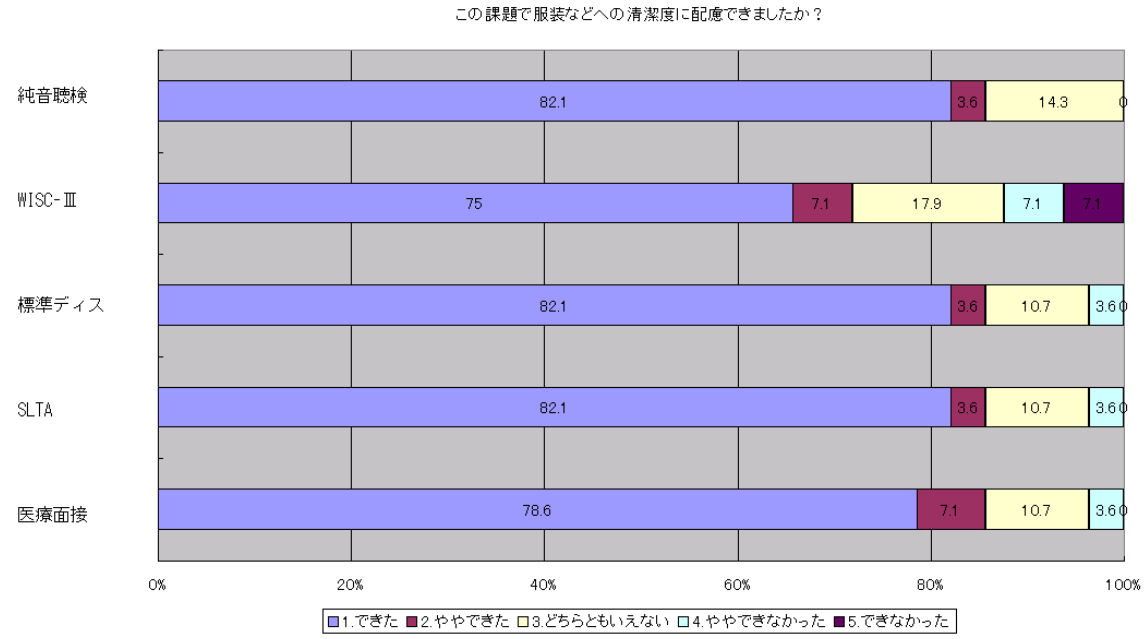
全ての課題で 60%前後の学生が「とても」「少し」再受験してみたいという意志があった。医療面接に関しては 20%以上の学生が再受験したくないという意志を示した。

11. 髪型への配慮



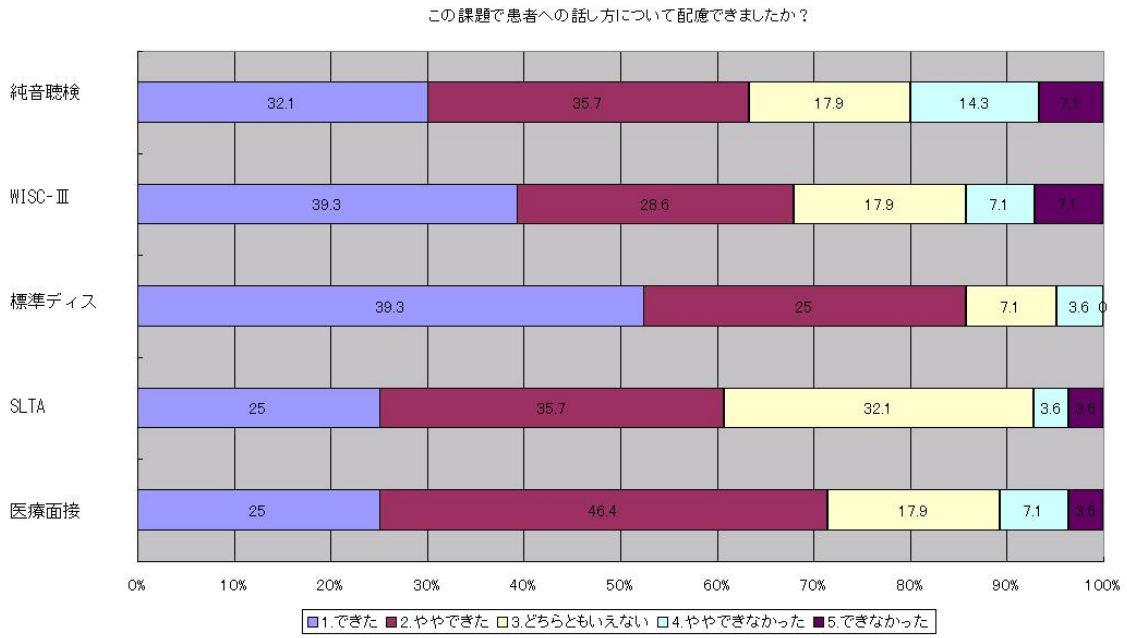
ほとんどの課題で 80%以上の学生が自分の髪型への配慮が「できた」「ややできた」と感じていることが伺えた。

12. 服装への配慮



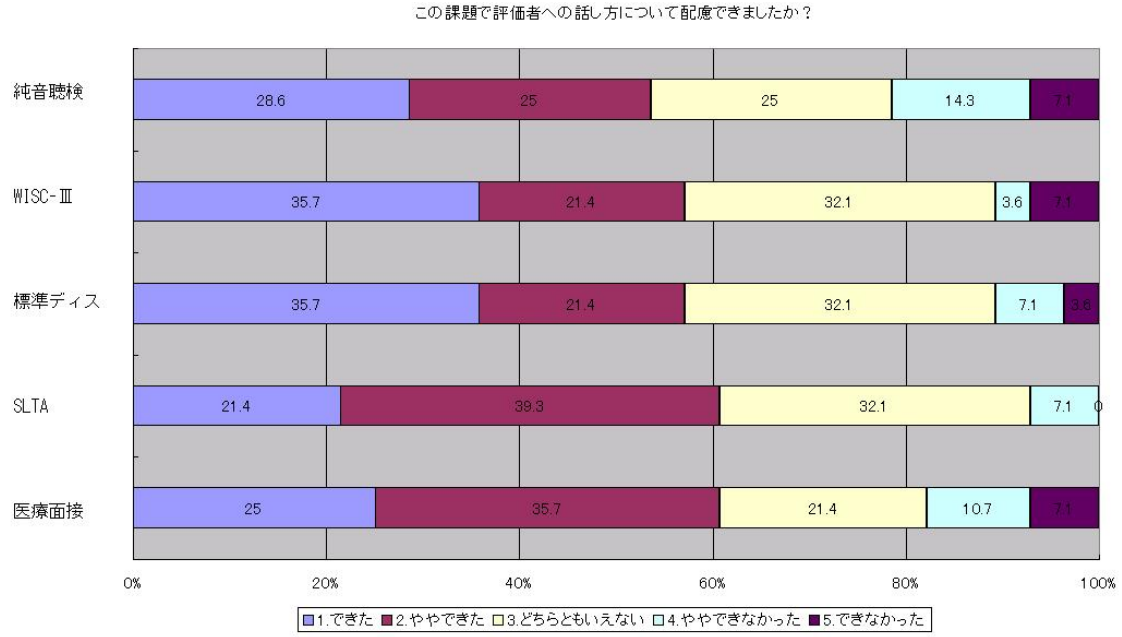
ほとんどの課題で 80%前後の学生が服装への配慮が「できた」「ややできた」と感じていることが伺えた。

13. 患者への話し方の配慮



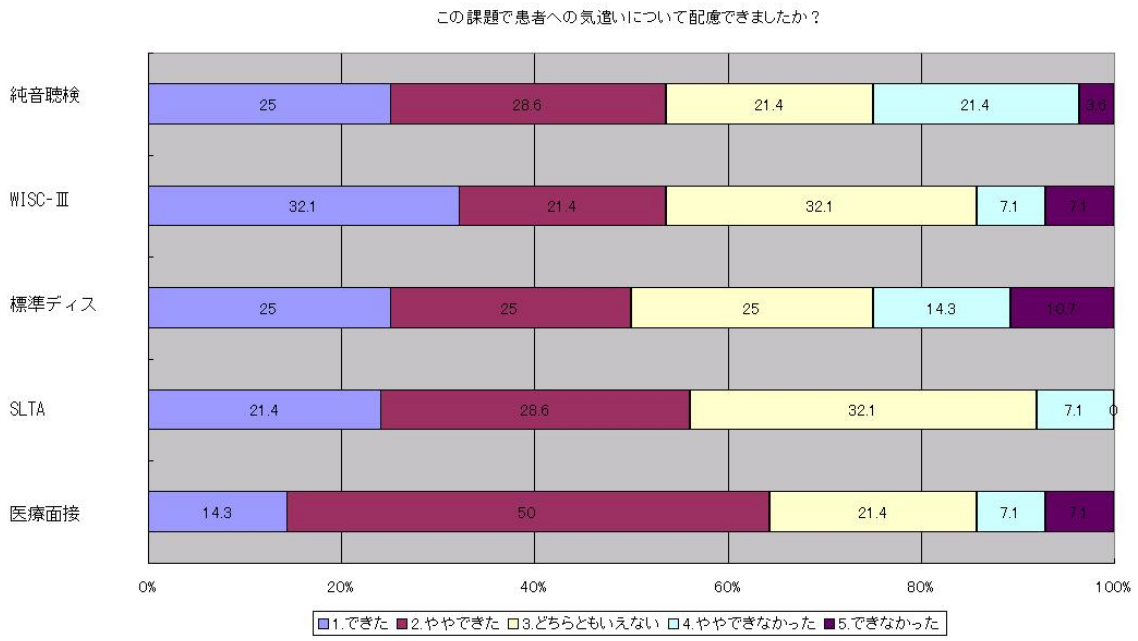
最も高い標準ディサースリア検査では 90%近い学生が患者への話し方に配慮できたと感じているのに対して、SLTA では 60%程度の学生がそう感じていた。

14. 評価者への話し方の配慮



すべての課題で 60%前後の学生が評価者への話し方について配慮が「できた」「ややできた」と感じていた。

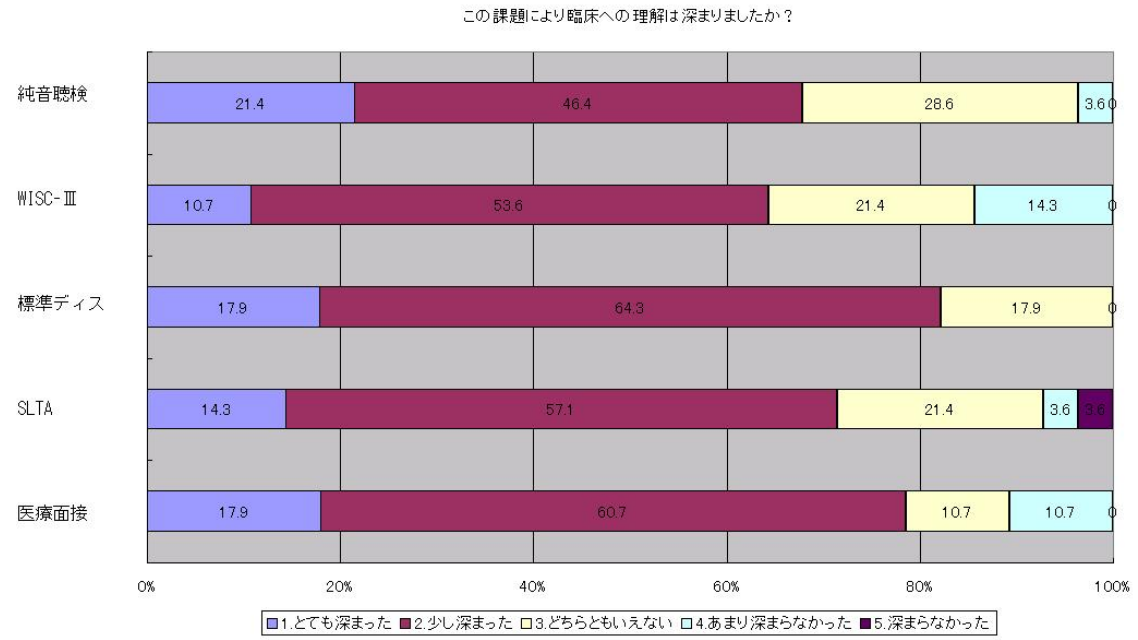
15. 患者への気遣い



最も高い医療面接では 60%以上の学生が患者への気遣いについて配慮が「できた」「ややできた」と感じていたのに対して、最も低い標準ディサースリア検査ではちょうど半数の学生がそう感じていた。

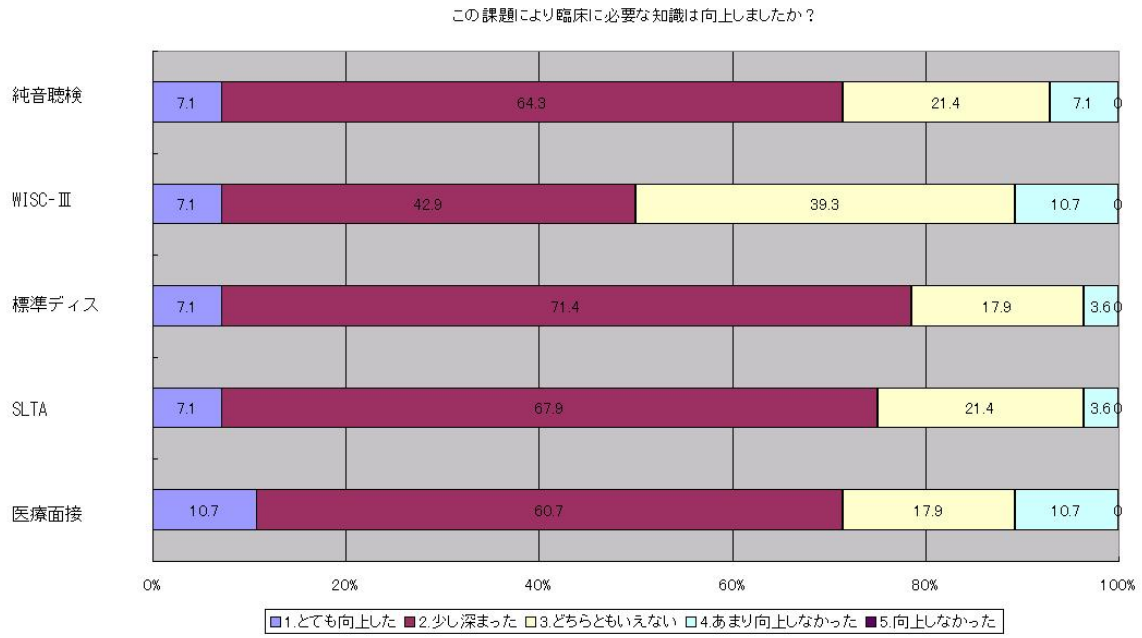
②臨床評価実習終了後の感想

1. 臨床への理解の深まり



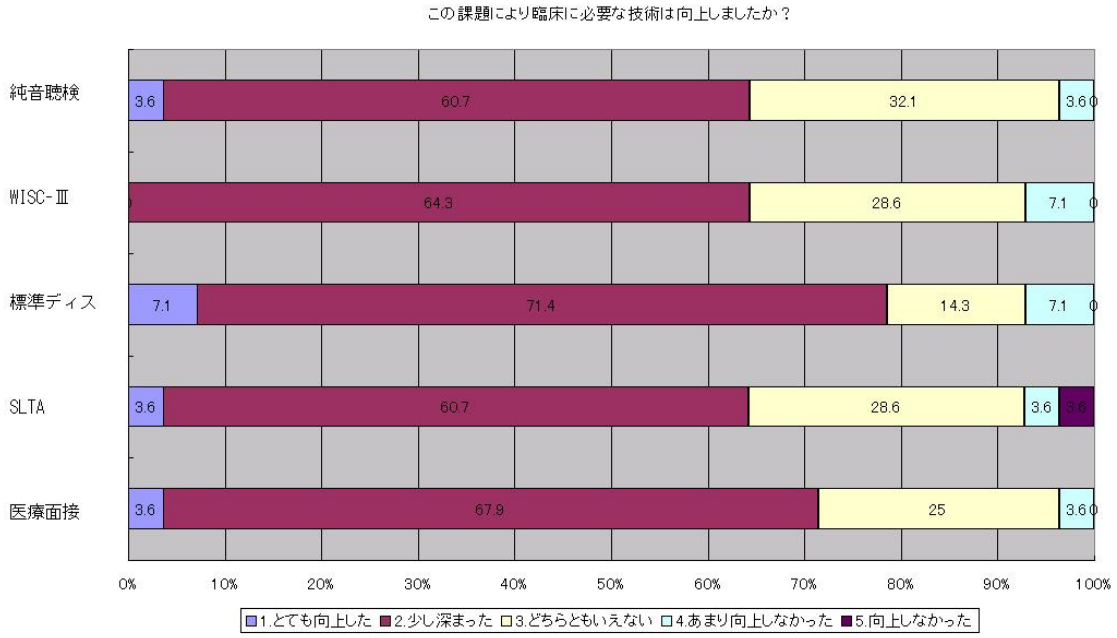
課題により臨床への理解が「とても深まった」「少し深まった」と感じている学生は全ての課題で 60%を超えており、特に医療面接と標準ディサースリア検査では 80%前後がそう感じていた。

2. 臨床に必要な知識の向上



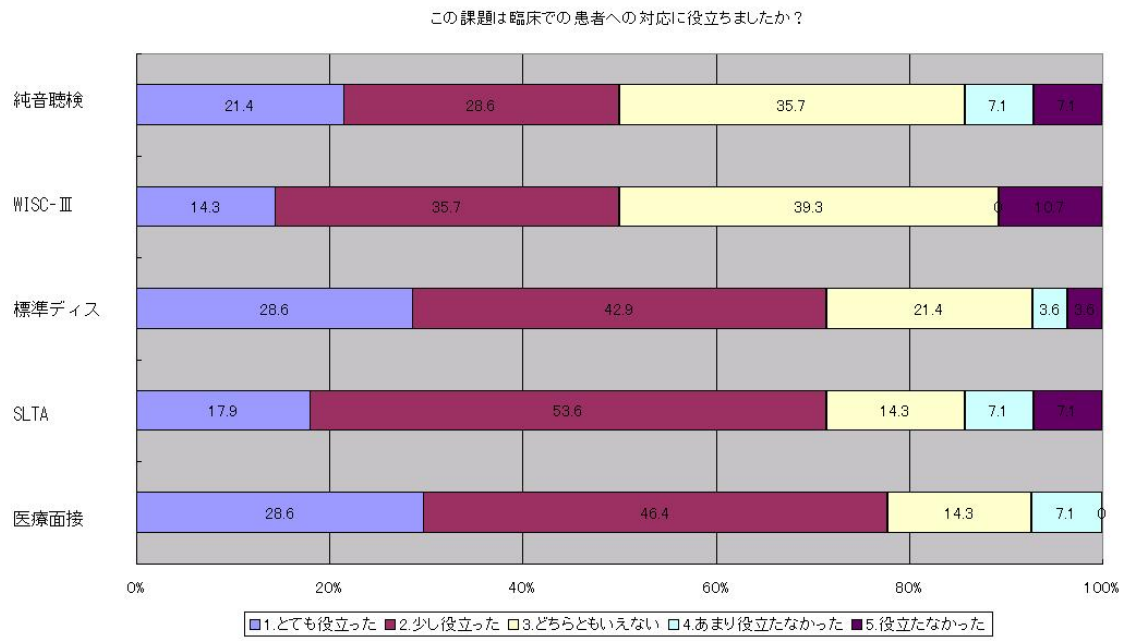
課題により臨床に必要な知識が「とても向上した」「少し向上した」と感じている学生はほとんどの課題で 70%を超えていた。課題によってはこの数値の低いものがあった（WISC-Ⅲ）。

3. 臨床に必要な技術の向上



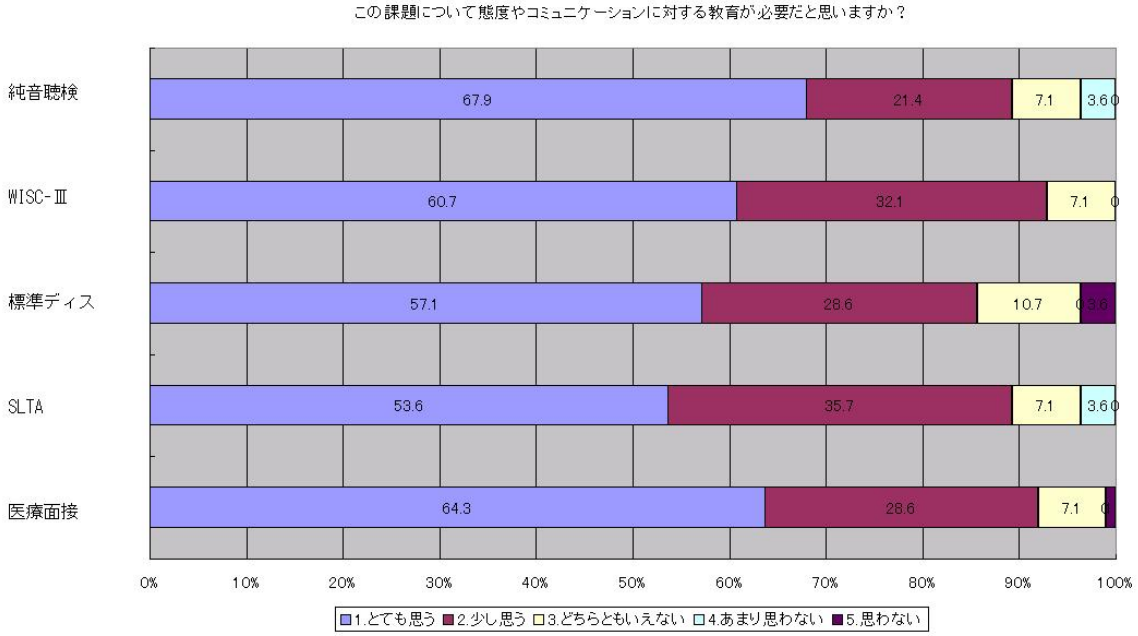
課題により臨床で必要な知識が「とても向上した」「少し向上した」と感じている学生は全ての課題で 60%を超えていた。医療面接と標準ディサースリアではこう感じる学生が多かった。

4. 患者への対応の有用性



課題が臨床での患者への対応に役立ったと感じたかどうかについては、課題によりばらつきがあった。医療面接・SLTA・標準ディサースリアについては 70%以上が「とても役立った」「少し役立った」と感じているのに対して、WISC-Ⅲと純音聴力検査については半数程度の学生がそう感じていた。

5．態度やコミュニケーションに対する教育の必要性



課題を遂行する際の態度やコミュニケーションに対する教育の必要性については、全ての課題について 90%前後の学生が「とても思う」「少し思う」と感じていた。「とても思う」と答えた学生も全ての課

題で 50%を超えていた。

③自由記述
　別紙 5-1～5-4

[OSCE の成績と臨床評価実習の関係]
①医療面接：相関係数 0.49
　　医療面接での不合格者（60/100 点未満）7 名中 7 名が評価実習でも 60/100 点未満であった。
　　医療面接での不合格者 7 名中 6 名に評価実習の指導者より「コミュニケーション能力に問題があり、患者やスタッフとのコミュニケーションに困難がある」旨のコメントがあった。
②標準失語症検査：相関係数 0.16
　　標準失語症検査不合格者（60/100 点未満）11 名中 6 名が評価実習でも 60/100 点未満であった。
③標準ディサースリア検査：相関係数 0.25
　　標準ディサースリア検査不合格者（60/100 点未満）7 名中 2 名が評価実習でも 60/100 点未満であった。
④WISC-Ⅲ：相関係数 0.50
　　WISC-Ⅲ不合格者（60/100 点未満）10 名中 8 名が評価実習でも 60/100 点未満であった。
⑤純音聴力検査：相関係数 0.47
　　純音聴力検査不合格者（60/100 点未満）13 名中 8 名が評価実習でも 60/100 点未満であった。
⑥総合成績：相関係数 0.53
　　総合成績が 60/100 点未満の５名中 4 名が評価実習でも 60/100 点未満であった。

[考察]
１．実施方法について
　OSCE についてはその有効性が広く認識され、医師養成過程を中心にコ・メディカルの養成過程にまで普及しつつあり、言語聴覚士（以下 ST）についても例外ではない。
　しかし、OSCE を米国で行われている原法通りに実施しようとすると、多大な準備と人員が必要である。この点が少人数の教員しかいない専門学校を中心になされている ST 教育における OSCE の実施が困難である要因の一つとなってきた。
　今回我々は、先行研究での成果を踏まえつつ、主体が少人数でも可能なように方法と実施項目および期間を工夫して OSCE を実施した。
　事後のアンケートについても先行研究を参考にするとともに、「実際の臨床実習に OSCE が役立ったか」という観点で、臨床評価実習後に項目を追加して実施した。
２．アンケートの結果について
　その結果、試験終了時点で最も低い課題でも７割以上の学生が課題に意義が「大変あった」「少しあった」と感じ、特に医療面接に関しては７割近くの学生が「大変意義があった」と感じていた。
　それだけでなく、実習終了後の感想としても、６割以上の学生が臨床への理解が「とても深まった」「少し深まった」、臨床に必要な知識についてはほとんどの課題で７割を超す学生が「とても向上した」「少し向上した」、臨床に必要な技術については全ての課題で６割の学生が「とても向上した」「少し向上した」と答え、多くの学生が「OSCE は実際の臨床実習に役に立った」と感じていることがわかった。

課題が臨床での患者への対応に役立ったかについては医療面接・SLTA・標準ディサースリア検査の３者と WISC-Ⅲ・純音聴力検査の２者で有用性に関する印象にかなりの差があったが、これは本校の学生が実際の臨床評価実習で施行する課題が前者であることが圧倒的に多いためと思われる。

また、態度やコミュニケーションに対する教育の必要性については全ての課題について９割前後の学生が必要だと「とても思う」「少し思う」と回答しており、特に「とても思う」という学生が全ての課題で過半数を超えていた。

アンケートの結果は学生が今回の OSCE について概ね肯定的に捉えていることを示唆しているといってよかろう。

ただ、自由記述では「実施時期を考慮してほしい」「OSCE により学科試験の勉強に困難があった」「評価が一定しない」「初めのほうで受ける学生が不利」などといった意見が複数あり、実施時期や実施方法、評価法などについては検討の余地があると思われる。

３．OSCE の成績と臨床評価実習成績の関係

OSCE の成績と臨床評価実習成績の相関係数を算出したところ、総合成績・医療面接・WISC・純音聴力検査の成績と臨床評価実習の成績が弱い相関関係を示し、SLTA と標準ディサースリアについては無相関であった。

医療面接での不合格者（60/100 点未満）の７名全員が臨床評価実習でも 60/100 点未満の成績であり、６名には「コミュニケーション能力に問題があり、患者やスタッフとのコミュニケーションに困難がある」旨の指導者のコメントがあった。

また、総合成績・WISC・純音聴力検査についても、不合格者の多くが臨床評価実習でも 60/100 点未満の成績であった。

以上のことから考えると、今回の OSCE は学生の臨床能力を相当程度反映したものであり、特に医療面接の OSCE は臨床実習でコミュニケーションに困難を示す学生を検出したり、実習の困難性を予測したりするのに有用だと思われる。

[まとめ]

学生の臨床能力を評価するのに今回我々が施行した OSCE は有効であった。学生も概ね肯定的に OSCE を捉えており、ニーズにも合致していた。

今後、施行時期や方法、評価法などをさらに工夫し、より有効な臨床能力育成教育を行う必要がある。

[文献]

日本医学教育学会臨床能力教育ワーキンググループ編：基本的臨床技能の学び方・教え方：南山堂, 2002 年

平成 17 年度文部科学省「専修学校教育重点支援プラン」委託事業：言語聴覚士養成課程への OSCE 導入のための教育プログラム作成報告書：学校法人敬心学園臨床福祉専門学校, 2006

平成 17 年度文部科学省「専修学校教育重点支援プラン」委託事業：言語聴覚士養成課程用　基本的臨技能テキスト：学校法人敬心学園臨床福祉専門学校, 2006

[抄録]

学生の臨床での能力を高めるために行われる客観的臨床能力評価（OSCE）は医師養成過程に始まり、徐々にコ・メディカルの養成過程にも広がりつつある。本校（高卒４年制養成校）では平成 18 年度３年次演習授業の評価として OSCE を実施した。実施項目は成人と小児のバランスに配慮し医療面接・標準失語症検査・標準ディサースリア検査・WISC-Ⅲ・純音聴力検査の５項目とした。医療面接は先行研究と同じ要領で行ったが、他の４つはマンパワーを考慮し本校独自の方法・評価で行った。実施後のアンケートは先行研究のものを参考にして作成し、臨床評価実習終了後に無記名・記名で実施した。

アンケートの結果、先行研究と同じく、試験終了後の学生は OSCE に対して概ね肯定的に捉えていた。また、実習が終了してからも、OSCE が実習に役立ったと捉えている学生が多かった。態度やコミュニケーションに関する教育のニーズも高いことが伺われた。

実施項目や方法、実施時期などについてはまだ検討の余地があると思われた。

[Abstract]

Objective, clinical ability evaluation (OSCE) done to improve the ability in clinical of the translation student here starts from the doctor training process, and is extending to co-medical training process gradually. OSCE was executed as an evaluation of the maneuver class three annuals 2006 fiscal year in this school (system training school of the graduate of a high school four years). Adult and infant's balances were considered and the execution item was assumed to be five items (a Medical Treatment Interview, a Standard Language Test of Aphasia(SLTA), an Assessment of Motor Speech for Dysarthria , and the WISC-Ⅲ, Pure Tone Audiometry). Other four went by the method and the evaluation of this original school in consideration of man power though the medical treatment interview was done according to the same points as the early research. The questionnaire after it executed it was made referring to the one of the early research, and after the clinical evaluation practice had ended, executed by anonymity.

The student after the examination had ended as well as the early research as a result of the questionnaire affirmatively roughly caught OSCE. Moreover, there were a lot of students who caught after the practice ended when OSCE was useful for the practice. It was seen that needs of the education concerning the attitude and communications were also high.

It seemed that it still needed more consideration about the execution item, the method, and the execution time, etc.

[別紙 2-3]

神経心理学演習後期試験要領

１．部屋の扉に向いて置かれた椅子に座り、SLTA「話す・単語の呼称」を施行する準備をする。

２．準備ができたら模擬患者を呼び入れる。

３．検査を施行し、記録用紙に記述する。時間は 20 分以内。

４．検査結果をもとに設問に答える。答えは解答用紙に記述する。時間は 30 分以内。

５．検査の記録用紙と設問の解答用紙を提出する。

神経心理学演習後期試験問題

１．SLTA の「話す・単語の呼称」と「話す・文の復唱」を模擬患者に施行せよ。

（60 点）

２．施行した結果に現れた症状を６つ書け。

（30 点）

３．施行した結果や施行時の観察から模擬患者の失語症をタイプ分類せよ。

（10 点）

[別紙 3]医療面接の項目のみ。以下項目同じ。

客観的臨床評価(OSCE)受験生アンケート１

１．医療面接の OSCE について
①OSCE を終えた時点での感想
質問１　予習での取り組みはどうでしたか？
1.十分だった　2.やや十分だった　3.どちらともいえない　4.やや不十分だった　5.全く不十分
質問２　課題中の緊張感はありましたか？
1.無かった　2.あまりなかった　3.どちらともいえない　4.少しあった　5.かなりあった
質問３　試験方法へのとまどいはありましたか？
1.無かった　2.あまりなかった　3.どちらともいえない　4.少しあった　5.かなりあった
質問４　課題中の時間の使い方は有効でしたか？
1.十分だった　2.やや十分だった　3.どちらともいえない　4.やや不十分だった　5.全く不十分
質問５　課題中の失敗が、結果に影響することはありましたか？
1.無かった　2.あまりなかった　3.どちらともいえない　4.少しあった　5.かなりあった
質問６　課題で自分の能力が発揮できましたか？
1.できた　2.ややできた　3.どちらともいえない　4.ややできなかった　5.できなかった
質問７　あなたへの、評価者からの評価はどうでしたか？
1.大変よい　2.少しよい　3.どちらともいえない　4.少し悪い　5.大変悪い
質問８　自分の欠点が明らかになりましたか？
1.大変なった　2.少しなった　3.どちらともいえない　4.あまりならなかった　5.全くならなかった
質問９　課題は意義があると感じましたか（試験終了時点の感想）？
1.大変あった　2.少しあった　3.どちらともいえない　4.ややなかった　5.全くなかった
質問 10　この課題を再度受験してみたいと思いましたか？
1.とても思った　2.少し思った　3.どちらともいえない　4.やや思わなかった　5.全く思わなかった
質問 11　この課題で自分の髪形について配慮できましたか？
1.できた　2.少しできた　3.どちらともいえない　4.少しできなかった　5.できなかった
質問 12　この課題で服装などへの清潔度に配慮できましたか？
1.できた　2.少しできた　3.どちらともいえない　4.少しできなかった　5.できなかった
質問 13　この課題で患者への話し方について配慮できましたか？
1.できた　2.少しできた　3.どちらともいえない　4.少しできなかった　5.できなかった
質問 14　この課題で評価者への話し方について配慮できましたか？
1.できた　2.少しできた　3.どちらともいえない　4.少しできなかった　5.できなかった
質問 15　この課題で患者への気遣いについて配慮できましたか？
1.できた　2.少しできた　3.どちらともいえない　4.少しできなかった　5.できなかった
②実習を終えた時点での感想
問題 16　この課題により臨床への理解は深まりましたか？
1.とても深まった　2.少し深まった　3.どちらともいえない　4.あまり深まらなかった　5.深まらなかった
問題 17　この課題により臨床に必要な知識は向上しましたか？
1.とても向上した　2.少し向上した　3.どちらともいえない　4.あまり向上しなかった　5.向上しなかった
問題 18　この課題により臨床に必要な技術は向上しましたか？
1.とても向上した　2.少し向上した　3.どちらともいえない　4.あまり向上しなかった　5.向上しなかった
問題 19　この課題は臨床での患者への対応に役立ちましたか？
1.とても役立った　2.少し役立った　3.どちらともいえない　4.あまり役立たなかった　5.役立たなかった
問題 20　医療面接について態度やコミュニケーションに対する教育が必要だと思いますか？
1.とても思う　2.少し思う　3.どちらともいえない　4.あまり思わない　5.思わない

[別紙 4]

客観的臨床評価(OSCE)受験生アンケート２

学籍番号＿＿＿＿＿＿　　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

１．OSCE のほかに必要な試験があると思う場合、どのような試験を、いつ行ってほしいか書いてください。

２．模擬患者からのフィードバックについて感想を書いてください。

３．教員・バイザーを含めた測定者からのフィードバックについて書いてください。

４．各ステーションの講義・演習・受験で、特に気がついたことがあれば書いてください。
①医療面接

②標準失語症検査

③標準デイサースリア検査

④WISC-Ⅲ

⑤純音聴力検査

５．その他 OSCE に関する意見があれば、書いてください。

[別紙 5-1]

H18 年度客観的臨床評価(OSCE)受験生アンケート２結果

１．OSCE のほかに必要な試験があると思う場合、どのような試験を、いつ行ってほしいか書いてください。

・実際の患者様とのフリートーク。
・患者を想定し、それぞれが緊張した空気の中模擬患者になる場があると人を見て自分のことを振り返られるので患者役をする機会があるといいです。
・高次脳機能障害のテストを授業中に実際に２人一組で行う。
・失語のディープテスト等各検査をさらに掘り下げるテストの手順をもっと勉強したかったです。
・コース立方体テスト。
・忙しくない時期（5-7 月）。
・実習の直前にも行ってほしいです。
・それぞれのタイプの失語症や構音障害の方とのコミュニケーションやフリートークの OSCE を行う。（１人につき一つのタイプではなく複数のタイプ。）
・失行・失認の検査を、SLTA の後に。
・GRBAS の試験を学期末テストの後に行ってほしい。
・どんな試験でも、早めに、余裕をもってスケジュールを考えて行ってほしい。

２．模擬患者からのフィードバックについて感想を書いてください。

・評価者からの目線だけでなく、実際に患者様の気持ちになってフイードバックしていただいたのですごくためになりました。
・細かい部分も見てもらって自分の欠点・直すべき点がすぐわかるので良いと思います。
・緊張しているのが相手にまで伝わり、緊張させてしまっていたのでもっとリラックスできるような雰囲気を作らなければならないと思った。
・上級生に気を遣っていたのか、率直な意見ではないように感じた。
・あまりフィードバックを聞けなかったので、してほしかったです。
・生徒によってフィードバックの深さが違うみたいです。臨床前に欠点を見つけてもらえる場なので、控えめでなくはっきり言ってもらえると良いです。（言われるのは辛いですが。）
・自分の長所・短所ともに、的確にフィードバックしてもらったので、良かったと思います。
・患者からの立場のフィードバックでよかった。
・できていないところをきちんと言ってもらえてよかった。
・率直な意見が聞けて良いと思います。
・自分が行って検査に対してどう思われているかを初めて知ることができ、自分の改善点が分かってよかった。
・コミュニケーションや、言葉遣いに対して率直な意見をもらうことができてよかったと思う。
・相手（患者）の受け取る印象がよく理解できました。
・参考にさせていただきました。

[別紙 5-2]

・自分の欠点を見つめる機会であったと思います。
・自分本位になっていたので患者の反応を待つことが大切だとわかった。
・良かったところと改善すべき点を両方伝えてくれてよかったです。
・模擬患者がマニュアルにこだわりすぎていた。
・患者さん役の方たちも緊張して、フィードバックどころじゃないような気がします。
・話し方、距離感が大事だと思った。
・自分では気づいていないところを注意してもらえたのでよかったです。
・模擬患者から自分の良かった点、悪かった点などを言ってもらい、自分では気づいていなかったことに気づくことができ、よかったと思います。
・自分の長所・欠点を全て言ってくれたので、自分が気づかなかったところに気づけてよかった。
・分かりやすく、ためになった。

３．教員・バイザーを含めた測定者からのフィードバックについて書いてください。
・自分では気づくことができなかったことを気づかせていただいてとてもよかったと思います。
・臨床からの目線で見てもらえるので、自分の欠点・直すべき点がわかり、勉強になります。
・自分の気づかないうちに口癖を言うので普段から気をつけようと思った。
・自分の足りない部分について適切なフィードバックがされたと思う。
・自分の悪いところを指摘してくださり、役に立ちました。
・先生によってフィードバックの深さが違うみたいです。臨床前に欠点を見つけてもらえる場なので、控えめでなくはっきり言ってもらえると良いです。（言われるのは辛いですが。）
・一人一人に対してのフィードバックを、その場で行ってほしかったと思います。
・もう少し時間をとって、一つずつの方法についてのフィードバックをしたかった。
・できていないところをきちんと言ってもらえてよかった。
・緊張感があってよいと思います。
・自分の欠点や次に注意することが明確になってよかった。
・自分の足りていない部分を適切に教えてくださっていました。
・事前に十分説明を。その場のプリントだけの説明では混乱します。
・もっと個人的にフィードバックをしてほしいです。
・患者の年齢・症状に適した提示を行う必要があると気づいた。
・全体を見てからの問題点を最後に教えてもらえたのが良かったです。
・検査が終了してすぐにフィードバックしてほしいです。
・全てにおいて準備不足だったと思う。
・どこが悪かったか細かく注意してくださったのでよかったです。
・個人的にフィードバックする時間が少なかったので、もっと具体的に、どうだったのかを聞きたかったです。
・臨床現場を経験されている先生方からのフィードバックは、とても参考になり、わかりやすかった。
・評価が一定でなく、どう改善していいか分かりづらかった。

[別紙 5-3]

４．各ステーションの講義・演習・受験で、特に気がついたことがあれば書いてください。

①医療面接

・後輩に模擬患者をしてもらうので、馴れ合いで緊張が薄れないようにすることが必要だと思います。
・一人一人にきちんとしたフィードバックの時間がほしい。
・フリートークに生かされたと思います。
・模擬患者の演技が上手でした。
・カメラがあるところ、ないところ、また先生で緊張感が違うところがあったと思います。
・ビデオカメラはプレッシャーがかかると思った。
・模擬患者が先生でなく、生徒だったので良かったと思います。

②標準失語症検査

・全項目した方がいいと思う。
・測定者・被験者からのフイードバックがなかったので、してほしかったです。
・ヒントやページ数が消してあったのはちょっと難しかったのではないかと思います。
・一人一人にきちんとしたフィードバックの時間がほしい。
・勉強不足を実感しました。
・普段の講義で行っているにもかかわらず、緊張して手順を一箇所誤った。
・試験内容について不明な点が多く、合格者の多くは終了者の情報を聞き出した人だった。
・先生方の威圧感があった。

③標準デイサースリア検査

・全項目した方がいいと思う。
・時間があれば全項目先生に見てもらいたいです。
・一人一人にきちんとしたフィードバックの時間がほしい。
・OSCE でできたとしても実際に患者様を目の前にして行うのとでは全然違いました。患者様への教示や声かけについてもっとフィードバックを行う必要があると実感しました。

④WISC-Ⅲ

・全項目した方がいいと思う。
・一人一人にきちんとしたフィードバックの時間がほしい。
・ビデオにとってフィードバックすると、検者の表情や声かけがどのようにすればよいかわかりやすいと思います。
・フリートークに詰まってしまった。

⑤純音聴力検査

[別紙 5-4]

５．その他 OSCE に関する意見があれば、書いてください。

・OSCE の試験期間が長く、学科試験の勉強が十分できなかったので、次年度からは期間と時間の配分を少し考えてほしいです。

・学生が受験する前に講義などで先生方が検査を行っている場面を見てみたかったです。

・全てに対してスケジュールが学期の最後に集中してしまって、学期末のテストに影響があったので、OSCE に関してはスケジュールの都合がつくのであれば調整を行った方がいいと感じた。

・実習に行って、実際に患者さんに検査を行うとき OSCE での経験がとても役に立ちました。OSCE で時間をとりすぎて、他の講義がテスト前まであったので、きつかったです。

・OSCE は一度では不十分な気がするので、時間的には難しいと思うのですが、２年生で一通り、３年生で一通りと回数を重ねると良いと思います。

・まとめて行うのではなく一年を通して行ってほしい。

・情報を知っているか知らないかで合否がある程度左右していた。これでは OSCE の意味がないと思う。

・待機室と OSCE を終わった人が一緒になってしまうことがあったので、教室を別々にしてほしかったです。

・学籍番号順だと初めのほうは不利のように感じた。待機室が一つなのは問題があると思う。朝一番で OSCE を受けるときに、先生方の準備がぎりぎりでバタバタと始まったので疲れた。

・OSCE を行う時期を変えたほうが良いと思います。

・もう少しスケジュールや日程（補講期間へのしわ寄せ等）のことを考えて行ってください。他の講義のレポート等と重なり、かなりキツかったです。